

# 大陸(中支)

思い出の4645銃

静岡県 望月利郎

私が昭和十七年春、名古屋城の天守閣をお堀の向こう側に望む中部第十三部隊の営門を、部隊長以下大勢の先輩諸氏に見送られて出発するときは、実弾三〇発を入れた新品の薬盒を身に着け、同じく新品の三八式騎兵銃を肩に歩武堂々と駅に向かった。また、広い道路には所狭しとばかりに、それぞれの家族が憲兵の目を盗むようにして、今生の別れを惜しんでいた風景が今も思い浮ぶ。

(中国では、湖北省黄陂城(漢口市南東約三〇キロ)

内に駐屯していた。幸三七一一部隊第四中隊徒步小隊(戦闘小隊)重機分隊に編入された時点で新品機銃はたちまち腐蝕、大の歩兵銃に変えられて、浙贛・大悟山・大別山の各作戦にはその銃と行動を共にした。その後の兵器検査の都度、手入れ不十分の宣告に泣いた。これも初年兵に科せられた運命かと諦めた。

そして昭和十八年四月十四日から六月十六日にわたりに行われた江南殲滅作戦は(別二号作戦ともいわれた)、有名な三国志に出てくる劉備玄徳の支配していた蜀の荊州(現江陵市)―宜昌市間の長江南地区で行われたもので、宜昌付近に碇留された大型船舶を岳州まで下航させるためであった。また、先の江北殲滅作戦(一号作戦)でその威力を発揮した第十一軍司令官横山中将は、第六戦区の敵をもついでにと、また敵司令

官孫連中が「日軍何するものぞ」と甘く見ていたのを先手を打って仕掛けた戦いだっただけだ。

そのころ、私は重機弾薬手として駐屯、黄陂を出発、京漢線孝感市より西進し、まず、漢江流域の仙桃鎮せんとうちん―汚陽さらに西南進して集結地監利へと進んだ。この監利付近に宿営中、分隊の頑固一徹親父的存在で重機射手だった山田兵長が技術要員として内地に帰還することになった。そのとき同兵長が「俺の身分だと思っただけがかわいがってくれ」と言いながら渡された銃がNo 4 6 4 5銃で、語呂がいいので今もって忘れられない銃番号だった。この銃は穴照門で命中率も高く、その後の実弾射撃ではいつも第一発は三百メートル向こうの幕的の黒点に命中するので分隊一番となり、狙撃手教育に参加した。そして昭和二十年一月七日、十九年度初年兵受領の中隊命令で広西省興地から武漢地区に長期出張のため、中隊を離れるまで4 6 5 6銃は私の守り神となった。

昭和十八年五月八日ころ、我々第四中隊は第一線を前進する歩兵第三十四連隊に追隨するごとく石首辺り

で長江を渡河し、霧気河沿いの行軍は大鵝池、太平、東港などの運河が多く点在していて、徒歩部隊を始め馬部隊は難渋した。霧気河の渡河点あたりからは敵の妨害が始まり、私たち弾薬中隊はいつも歩兵連隊に近い位置にあった。

この日歩兵第三十四連隊は、太平と東港運河の中間にあり、我々の宿営地はその北東五キロぐらいの楊家廠付近であった。前夜来その北西の何家漂方向では遠雷のような砲撃音に緊張し、出発に先立って銃には弾込めして安全装置にし、第二分隊の白井君と共に尖兵となり中隊の先頭に立った。

その日の任務は歩三十四連隊に弾薬交付が目的で、夕刻には宿営地に戻る予定だったので各自の背囊は宿営地に残置し、神谷兵長がその監視のために残った。私たちは昼食一食分の入った飯盒袋を腰に括り付けて軽装で出発した。宿営地を出て三キロぐらいの地点で、いわゆる中国特有の土饅頭墓地が沢山ある中のジグザグな道を通り抜けるように行くと、王家舗の部落が左にある。そして左側の竹藪に囲まれた民家の見える所

に差し掛かると、突然左側の竹藪あたりから銃声一発、弾は私の頭上高くジューンの音と共に右後方に消えた。

私は敵だと言いながら第二発目を聞く前に左に走り土饅頭に取り付きざま銃の安全装置を外した。そのとき前方の竹藪の陰にいたと思われる敵の歩哨二人が水田の畦道を懸命に逃げ始めた。距離は百メートルぐらいだ。私は4645銃を構え、先になつて逃げて行く敵に照準を合わせて穴照門に入ると引き金を引いた、轟音一発、手応えあり、二メートルぐらいの高さの土手から水田の中へ水飛沫を上げて落ちたまま動かない。敵は背囊を背負い横に傘を付けていたのが印象に残る。動かないのを確かめてから第二発目を装填し、二人目の敵をと銃を構えようとしたとき、後方で「望月分隊へ戻れ」の大声に振り向くと馬から重機を下している最中だ。

早駆けで戻ると牧分隊長と平田兵長などが同時に「望月、敵は？」の間である。私は指差しながら「あの部落から前進方向へ回り込むようにして逃げた」と答え、重機下しを手伝った。重機はその場で結合され

前面の土饅頭に据えた、と同時に前面の敵が撃ち始めた。射手は平田兵長、その右に私が、また左に前川上等兵がいる。私が前脚の固定ネジを締め速やかに射撃開始だ。一連、二連と連射（チェッコ重機は一連が百発）。敵との距離は三百〜四百メートルぐらいか。こちらが撃っている間敵は撃つてこないが、中止すると猛然と乱射だ。伏せている襟首から跳ね上がった土砂が入ってくる。気持ちのいいものではない。

我々の重機座は左家屋、重機の將軍塚が横一線になるような布陣で、他の二、三、四分隊は左家屋の向こう側に展開して軽機等で応戦しているようだ。私は腹這いになり弾帯に弾を詰める。五百発入りの弾薬箱の弾も少なくなってきたので、今度は千発入りの箱から補充をしているとき、背中から腰にかけて何か変に湿ってきたのに気がついた。それは腰に着けている分隊員の昼食用の肉の甘煮がいっぱい入っている飯盒から汁がにじみ出てきているのだと気がついた。激戦の最中なのでどうすることもできない。

また、重機座の後方には中隊長がおり「重機分隊は

なぜ鉄帽を着けないのか早く被れ」と大きな声で怒鳴っている。そのとき、分隊では平田射手のみが被っていただけだった。中隊長の傍らでは竹内さんが敵陣目掛けて擲弾筒で打ち込んでいる。このような調子がいよいよ続くしているうち、小隊長からの通伝で「小隊は今から突撃する、重機は援護せよ」との連絡があり、いよいよ緊張した。各分隊の軽機は一斉射撃を開始、そして喊声と共に突撃、重機は銃身も燃えよとばかりに撃ちまくった。

敵も負けじとばかりに擲弾銃等火力を最大限に駆使して死に物狂いで反撃してくる。我々も懸命に攻撃するも戦況は変わらず、かえって敵は兵力を増強している模様だ。この突撃で小隊長は頸に、第四分隊長は足に手榴弾の破片創を受けた。敵は前面の森の中に広く布陣し、歩兵第三十四連隊も西方面から攻撃しているとのことだった。その敵は常德方面より北上中の約二千以上の大部隊で、軽迫及び重迫を多数装備しているようである。うでなかなか強気だった。

何百発撃つただろうか空葉が物凄い。射撃中突然

重機が故障、射撃ができなくなったので死角に下げて修理。原因は、銃口に近い所にある連・単発切り換えの丸い転輪のガス穴の目が詰まっていたためであった。手早く調整修理して結合後、隙間を見て早めに昼食を済ませようとのことで、腹這いになったままでも味も香りもない昼食が終わった。

その間、敵は相変わらず撃ってくる。そうこうしているうちに平田さんが煙草（チエンメン）を取りだして皆に分けてくれたがこのときに言った言葉が妙に気になった。それは「死んじまっちゃ喫えないからなあ」だった。

短い一時だったが再び重機を定位置に据え直して弾帯を挿入し、積桿こみかんを引いて装填し、照準を定めていよいよ押し金して射撃しようとした瞬間、敵陣で大きなパキツと竹を割るような発射音がした。すると平田さんが「ウー」と小さい声を発してのけぞるように上を向いて倒れた。両手で銃把を握っていたが、一瞬にして仰向けになり顔面からはたちまち血の気は消え失せ土色に変わった。

私と前川さんはい寄り、平田さんを下げながら衛生兵を呼んだ。敵弾は左の眉すれすれの上で鉄帽には当たらず掠めるようにして、当たった所には穴が明き血が少し流れ出している。左頭部貫通銃創だ。顎紐を解き鉄帽を外すと大量の血と共に脳の内容物がドーツと流れ出た。七・九ミリの敵弾は後頭と鉄帽を共に貫いていて、後頭部は親指大より大きな穴が、鉄帽は外に反り返ったように穴があいていた。分隊長もはい寄って来てこれを見ると「よし、平田の仇討」とばかりに銃把を握り撃ちまくった。その形相はすさまじく今までに見たこともない氣迫だった。そして次の弾帯を装入したとき、楊家廠部落に待機中の連隊本部の道路小隊と一中隊の徒歩小隊が応援に駆け付けてくれた。この編成隊の迫撃砲が重機陣地の後方に位置して攻撃を始めるとともに、我々の中隊は任務である弾薬輸送につくようにとの命令で重機を分解しているとき、敵の迫撃砲弾が右方の將軍塚付近に落下、轟音と共に爆發、二発目は我々の身近に落下し始めた。私は脚を担いで左後方に脱兎の如く懸命に走る。三〇メートル

も行かないうちに三発目が先ほどまで重機のあつた辺りで炸裂した。本当に一、二分の差でそこに、もたもたしていたら分隊全員が殺されるところだった。敵の迫撃砲に追いたてられるように後退し、中隊を収集してみると、この戦闘で戦死傷三名、加えて馬が二頭ほどやられたとも聞いた。

本来の任務ということで彼らの砲声を背にして梁瀬三十四連隊に弾薬交付の急命で戦場を離脱し、青石碑―太平運河を経て何家大冠付近で交付を完了した。戦死された平田さんの亡骸は重機馬の背に乗せて運び、その夜は太平運河東岸の黄泗嘴付近まで反転して宿営に入ったのは五月十日ころだった。

弾薬の補給を受けた歩三十四連隊はその後東港河方面の敵を撃破し、師団命令により反転、第二期作戦のため北上、揚子江の松滋方面に転進した。翌朝、黄泗嘴を出發するとき、忙しさに追われて穴のあいた平田さんの鉄帽を忘れて出發、楊家廠の宿営地に戻る途中で忘れたのに気がついたが取りに戻ることができず、本当に申し訳ないと心で詫げる始末だ。宿営地に着く

と早速平田さんを茶毘にする支度だ。近辺の一軒屋を取壊し柱などを井桁に組み戸板に乗せて、その晩、私は屍衛兵となった平田さんを見送った。平田さんの遺骨は生前愛用していた飯盒に納めて三角巾に包んで私の首に下げ、その後の作戦行動を共にした。

また、私たちの援護に駆け付けてくれた戦闘小隊も、その後、優勢な敵の迫撃砲の集中砲火の攻撃を受け、宮下中隊長をはじめ第一中隊の波多野分隊長など五、六名の戦死傷者の犠牲の出たことを作戦終了後になって聞いた（江南殲滅作戦は一、二期と区分され平田さんの戦死はその一期でした）。行動間は私の胸前にあって一カ月間を共にして、駐屯地の黄陂城に帰営したのは六月十八日ころだった。

## 全滅を期した

### 芷江（西湘）撤退作戦

三重県 松本 荘衛

芷江作戦は昭和二十年四月十一日夜、第一百六師団の挺進隊は集結地を出発し、四月十九日に所要の部署への進出を行ったが、その後の状況は重慶軍の抵抗は極めて頑強で、以後、米式装備の敵と対戦し、多くの損害を出しました。

―上膊部貫痛銃創を受く―

芷江作戦もいよいよ終止符を打つ時がやってきた。長途の進攻作戦も、敵正規軍の意外な抵抗を受け、その堅陣を抜くことができず、内地からはるばる来た援軍の「弾」部隊は敵の都市、新化の町で攻撃頓座して前進できず、左翼「広」師団の武崗で前進をはばまれての苦戦は兵器・弾薬・物資、特に食糧の欠乏によ